

事例3 郡部・公立

地域資源・課題をテーマとする プロセス重視の探究学習を、 町役場と連携して進める 岩手県立葛巻高校

特色化・魅力化の推進の背景

町唯一の高校としての特色を生かした学校を目指す

地元自治体の強力な支援の下、連携型の中高一貫教育や「山村留学」の実施による県内外からの生徒募集などにより早くから取り組んできた岩手県立葛巻高校。葛巻町唯一の高校として、同町ならではの資源や課題をテーマとする探究学習を構築してきた。「町全体で人を育てる」という考えが根づく同町は、探究学習において高校生が試行錯誤するプロセスにこそ学びがあるという同校の考えに共感。同校の探究学習には町役場の職員を始めとする地域の人たちが多くかかわる。地域からは生徒がよく育ち、多様な進路を実現できる高校として評価され、山村留学により同校を卒業した生徒たちが、大学を経て社会人として再び同町に戻ってくる事例も複数生まれている。

岩手県立葛巻高校は2002年度より、同校が所在する葛巻町内の3つの町立中学校と連携型中高一貫教育を推進している。具体的には、数学、英語を中心とする全教科における授業交流や部活動交流など、地域に根差した特色ある教育活動に取り組んできた。

岩手県では少子化に伴う生徒数の長期的な減少が見込まれており、近年、公立高校の学級減や統廃合などの再編が課題となっている。そうした中で、葛巻高校を唯一の高校として擁する葛巻町は、同校が1学年2学級を維持し、教員数を確保することができれば、中高一貫教育を含む町の教育の持続可能

性は高まると考え、生徒募集の一環として「くずまき山村留学」を15年度に県内で初めて導入。寄宿舎の整備や町営学習塾の無料開放といった、葛巻町

による留学生への経済的な支援もあり、同制度導入以降、山村留学で同校に入学した生徒数は26年度に100人を突破した。

菊地健校長は「本校の特色は葛巻町唯一の高校として地域に大切にされていることであり、その特色を生かしながら、生徒が自身のキャリアを展望できる学校をつくるのが本校に期待される役割だ」と語る。

「高校等への進学率が約99%に達し、生徒の興味・関心、希望進路などが多様化している現在では、いずれの高校にも、自校に進学するどのような資質・能力が身につく、人生の可能性が開か

学校概要

設立 1948（昭和23）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約40人

2025年度卒業生進路実績 国公立大は、山形大、茨城大、宇都宮大、釧路公立大、東北公益文科大、高崎経済大に延べ7人が合格。私立大は、盛岡大、東北学院大、宮城学院女子大、東北芸術工科大、中央学院大、大正大、東京国際大に延べ8人が合格。短大・専門学校進学15人。就職12人。

れるのかを、生徒や保護者に示すことが求められています。町の資源や課題を題材にした学びを町の人たちとともに体験できるカリキュラムを構築しつつ、そうした町での学びを通して育った生徒の姿を校外に伝えることで、葛巻高校は、地域の人たちが『葛巻町に葛巻高校はなくてはならない存在』『我



教務図書情報部
一ノ渡 靖彦
いちのわたり・やすひこ
同校に赴任して5年目。
保健体育科。



教務図書情報部
島山 幸治
はたけやま・こうじ
同校に赴任して6年目。
理科（化学）。



校長
菊地 健
きくち・けん
同校に赴任して1年目。

どう進める？ 高校の特色化・魅力化

—生徒を主語にした学校づくりに向けて

が子を葛巻高校に通わせたい」と思える価値のある高校になるのだと考えています」

具体的な取り組み

地域と強固に連携した探究学習を推進

葛巻町唯一の高校という特色を生かした同校の教育活動の中心に据えられているのが、総合的な探究の時間である「葛高ミライノカタチプロジェクト」だ。同校のスクール・ポリシーを踏まえて、同時間では「豊かな人間性」「地域貢献心」「思考力・判断力・表現力・探究心」を育成することを目指し、葛巻町や地元企業、近隣の中学校、大学などと連携しながら、1・2年次は2単位、3年次は1単位で地域の魅力や課題などをテーマとする探究学習に取り組む（図1）。

生徒が設定する課題には、「葛巻町・葛巻高校でしかできないこと」が求められる。例えば25年度の2年生は、葛巻町と協働して同町の特産品の1つである「くずまき鍋」の新商品を開発し、町民祭で地域の人たちに振る舞った。その商品は現在、地域の飲食店での販売が検討されている。また、26年度は「酪農の現状と葛巻町の魅力を知ってもらう」という目的の下、3年生が2

図1 総合的な探究の時間 大綱 「葛高ミライノカタチプロジェクト」概念図



※学校資料をそのまま掲載。

泊3日の酪農体験の旅を地元の酪農家と企画・考案し、試験的に実施した。地域と密接に連携した探究学習が実現できているのは、「町と学校が多様な生徒を受け入れ、育ててきた歴史があるからだ」と、教務図書情報部の山幸治先生は語る。

様々な背景を持つ生徒たちと長年接する中で、本校の教師、そして町の人たちの中に、高校生ならではの意見を受け止める土壌がより豊かに育まれていたように思います。実際、本校の生徒は探究学習を通じて町の魅力化につながる様々な提案を行っています。そうした生徒のアクションに対して町役場の人たちは「それ、面白いね」「一緒にやれるか考えてみようか」などと、常に肯定的に生徒に向き合ってくれます。

同校の教師たちは生徒の探究学習に伴走するが、町役場を始めとする地域の人たちとのやり取りは多くの場合、教師を介さず、生徒が直接行っている。

「外部の方とのオンライン会議も生徒は自分たちで設定しますし、校外活動の実施要項は生徒が作成し、起案します。時には失敗しながらも、自分たちで何かを成し遂げるプロセスを高校時代に経験

できることは、今後の進路やキャリアの可能性を大きく広げることにつながると考えています」（畠山先生）

教務図書情報部の一ノ瀬靖彦先生は、成果以上にプロセスに価値を置く自校の探究学習観に地域の人たちも共感してくれていると感じるという。

「生徒の考えには、詰めが甘い部分も少なくないと思います。それでも、高校時代に他者と協働して試行錯誤する経験の価値を分かってくれている町役場の皆さんは、生徒の話にじっくりと耳を傾けてくれます。人を育てることの大きさを町と共有できていることは本校の大きな強みの1つです」

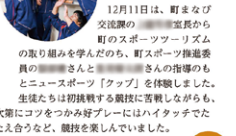
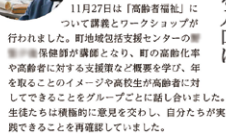
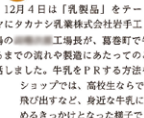
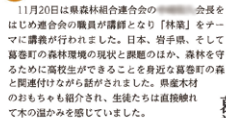
特色化・魅力化の推進のポイント

目的に立ち返れるように取り組みを見える化する

探究学習を始めとする同校の教育活動の実態を地域に伝えることも、同校と町が一体となつて進めている。

例えば、同校の探究学習の成果報告会は葛巻町教育委員会（以下、町教委）の協力の下、例年町役場庁舎の多目的ホールで開催している。また、同時期に、約1週間にわたって庁舎内の廊下に探究学習に関するポスターを掲示し、町民への周知も行っている。さらに、毎月発行される町の広報誌でも、

岩手県立葛巻高校レポート



総合的な探究の時間「くずまきゼミ」
葛巻町を知り、深める入口

乳製品の調製が印象深いです。家の近くに工場があり、
ていることも多かったですが、
めて葛巻町の牛や牛乳のこ
深く知ることができたからで
たくさんのお菓実があるこ
知る機会にもなり、道路選択
生かされると思います。

さん（久慈市出身）

多種多様な分野の方の訓を受けたことで、これまで知った世界を知り、将来への自分の可能性も広がったに感じます。

どの分野の方々も課題を解決に向けて模索しながら組んでいて感銘を受けました。

さん(静岡県出身)

町の特色であるミルク・ワイン・クリーンエネルギーについて、今に至るまでの歴史や努力を知ることができました。私が感じ取ったことを葛巻町を知らない人にも伝えたいと思います。

また私の生活が多くの人にええられていることに気づきました。

広報くずまき・2025（令和7）年1月1日（14）

※葛巻町『広報くずまき』（2025年1月号）を抜粋して掲載。

同校の教育活動を2ページにわたって紹介している(図2)。

そうした学校へのかかわりを今後も維持・拡充してもらうため、同校の教師たちは機会があれば町役場を訪問し、町教委はもちろん、それ以外の部署の職員ともコミュニケーションを取ることを心がけている。

『役場内で異動があつても、『学校のことはあの人にも相談できる』といった関係性をいろいろな人と構築しておけば、教育活動の持続可能性を向上させることができます。本校のことをよく知っている人、本校とかかわったことがある人を、1人でも多く増やしていくことが重要です』(畠山先生)

「葛高ミライノカタチプロジェクト」

概念図（P.15図1）を作成したのも、これまで同校が取り組んできたことを言語化することで、同校の教師全員が探究学習の目的や3年間の流れについて目線合わせをしやすくし、活動の持続可能性を高めるためだ。

「特色化や魅力化を意識して」というよりは、目の前にいる生徒にこれからの社会で求められる資質・能力を育成するという思いで探究学習をブラッシュアップしてきました。それを言語化したことで、本校の特色や立ち返る軸が明確になりましたが、社会や教育環境はもちろん、生徒も教師も変化してきます。概念図自体も、そうした変

教育委員会が**考**える

特色化
魅力化

学びを活性化する環境を守り、
学校の主体的な取り組みを支援



岩手県は2020年10月、各県立高校が特色・魅力ある学校づくりを主体的に推進できるよう、今後の県立高校のあり方や関係機関と連携した特色ある教育課程の例などを示した「いわての高校魅力化グランドデザイン for 2031（岩手県立高等学校に関するスクール・ミッション）」を策定しました。同グランドデザインでは、高校の特色や魅力を考える3つの枠組みとして、「地域連携」「学術・国際連携」「産学連携」を設定しました。各校はそれらの枠組みを意識した上でスクール・ポリシーを策定し、地元自治体、企業、研究機関などの連携先と協働しながら、研究特色・魅力化を進めてきました。

一方で、生徒数の減少が避けられない中、26年4月には、小・中学生と高校生からの意見聴取や地域での説明会などを経て、「第3期県立高等学校再編計画」を取りまとめました。同計画では、高校教育の質を維持するために、各校1学年20人を超える生徒数は必要とし

た上で、一定の条件を満たす1学年1
学級の普通高校を「地域校」として位
置づけ、地域の教育機会を保障する考
えを示しました。今後、本県内でも小
規模校は増加していく見通しのため、
遠隔教育や小規模校間での生徒同士の
交流などを充実させることで、学びの
活性化を図っていきたいと考えていま
す。また、地域産業との連携やICT
の活用を推進することを通じて多様な
学びと進路支援の実現を図り、教育の
質の向上と機会の確保を両立させる方
針です。

特色化・魅力化は、各校が地域の状況に応じて主体的に取り組むものであり、教育委員会が果たすべき役割はその後押しであると考えています。既に各校の教育活動の発信の基盤となるウェブサイトの整備は完了し、葛巻高校などで実施してきた県外からの「いわて留学」も、18校が実施するまでになりました。今後も各校の教師や生徒と対話を重ねながら、岩手県としてのの特色化・魅力化の取り組みを模索していきます。

本特集を振り返って

各教師・生徒が思う自校の特色・魅力を
言語化し、共有する

本特集の課題整理において、全国普通
科高等学校長会の佐藤^{いさお}事務局長が「私
はすべての高校に特色・魅力はあると確
信しています。だからこそ、まずは学校
内で現状を言語化して共有することで、
自校の特色や魅力を捉え直すことがで
きます」とおっしゃっていましたが、まさ
にそれは、長崎県立佐世保南高校の舟越^{ふし}
裕校長のご実践や3校の事例の共通点の



VIEWnext 編集部
統括責任者
柏木 崇

1つであり、本特集の冒頭で提示した「各校は特色化・魅力化をどのように進めていけばよいのか」という問いを考える上で、大きなヒントになったのではないのでしょうか。自校に特色や魅力が存在するにもかかわらず、それが何なのかは教師や生徒の間で共通認識が図られていなければ、「自校にはこれといった特色や魅力はない。何か新しい取り組みを考えなければ……」といった状況に陥りかねません。そうならないためにも、各教師・生徒が自校の特色・魅力だと思っている点を言語化することが重要であり、そしてそれこそが共通認識を図る手立てであるとともに、特色化・魅力化を進めていく上で中核となるものだと考えます。一案ですが、次のようなステップで自校の特色化・魅力化を推進していくとよいのではないのでしょうか。

- ステップ1** 特色化・魅力化の推進のステップ（本ステップ1～5）について共通理解を図る
- ステップ2** 特色化・魅力化のそれぞれの意味や相互の関係の理解（P.5図1・2）を学校全体で図る
- ステップ3** 自校の最上位目標、育てたい生徒像を確認する
- ステップ4** 自校の現状について、特色化の度合いと魅力化の状況の2軸による4象限のマトリクスで整理する（P.6図3）
- ステップ5** ステップ4を踏まえて、地域や外部とも連携・対話をしながら、取り組みの改善や新しい取り組みの検討をする

特色化・魅力化の解釈がぶれていると、自校の魅力・特色を言語化できたとしても共通認識が図れたとは言えないため、早い段階でその点は確認しておきたいところです（ステップ2）。また、ステップ5の取り組みの改善や新しい取り組みの検討が「生徒を主語にした」ものになるように必ず立ち返るべきなのが、スクール・ポリシーや育てたい生徒像などの最上位目標であり、その点も早い段階で確認しておきたいことから、ステップ3に配置しました。

言語化の過程で行われる教師間の対話では、教師一人ひとりが安心して話せる環境づくりが求められます。他者の発言・提案を否定・評価せず、挑戦することを歓迎する姿勢を、管理職の先生が率先して見せていくことが重要ではないのでしょうか。

化を踏まえて改善していくものだと思います」（一ノ渡先生）

こうした探究学習を継続してきた結果、自ら探究学習のテーマを設定し、楽しく、主体的に取り組む生徒が増えてきた。大学入試や就職活動における採用選考の面接において、高校時代の探究学習の経験を語る際には、多くの生徒が成果ではなく、町の人たちと協働した経験、すなわちプロセスを語っている。

生徒の言葉で探究学習を発信する場合は、日常的にも設けられている。

「約60校の岩手県立高校は岩手県教育委員会のウェブサイトを通じて、自校の教育活動を発信しています。本校も探究学習の進捗や寮生活の様子などを発信していますが、記事の4割程度は生徒や卒業生が執筆しています。教師による記事のチェックは最低限にとどめ、できるだけ生徒自身の言葉で、生徒が感じている本校の魅力を全国に伝えるようにしています」（畠山先生）

近年、葛巻町の中学校を卒業した生徒の7割程度が葛巻高校に進学している。同校以外の高校に進学する場合、

その多くは、部活動を理由とする都市部の私立高校への進学だ。葛巻高校では26年度も「物理」や「情報」で遠隔授業を実施し、生徒が専門的な指導を受けられる体制を継続。国公立大学への進学から就職まで、多様な進路を実現する同校の教育活動は地域の生徒や保護者に評価され、選ばれる高校となっている。

山村留学開始から10年以上が経過した現在、関東や関西の大学に進学した県外出身の生徒たちが、社会人になつて葛巻町に戻ってきているという。

「葛巻高校と葛巻町が、自分が成長した場所、豊かな人間関係が築かれた場所であることから、彼らは葛巻町に戻ってきているのだと思います。生徒の人生の可能性を広げているという点で、本校は町とともに、生徒に対して魅力を発揮できているのだと考えています。今後も地域とつながり、探究学習の目的に常に立ち返ることで、教師間の熱量を学校全体のものとしながら、生徒の成長のための取り組みの深化を町とともに図っていききたいと思っています」（菊地校長）

「葛巻高校と葛巻町が、自分が成長した場所、豊かな人間関係が築かれた場所であることから、彼らは葛巻町に戻ってきているのだと思います。生徒の人生の可能性を広げているという点で、本校は町とともに、生徒に対して魅力を発揮できているのだと考えています。今後も地域とつながり、探究学習の目的に常に立ち返ることで、教師間の熱量を学校全体のものとしながら、生徒の成長のための取り組みの深化を町とともに図っていききたいと思っています」（菊地校長）